

「業平道」は、天理市櫛本の在原寺から、大和郡山、安堵町を通り、法隆寺の南大門前を過ぎて竜田川を渡り、十三峠を越えて八尾の高安の玉祖神社に至る古道で、今もキレイに残る道には、いにしへの風景を辿ることが出来ます。この道はまた「伊勢物語」に語られる、平安時代の歌人・在原業平が、天理から河内の高安の恋人・河内姫のもとに通った道といわれ、業平伝説が数多く残るロマンの道でもあります。

これは「業平道」の紹介文ですが、大和郡山市の「ふるさと歴史事典」を元としています。斑鳩町や平群町の「業平道」紹介もほぼ同文、奈良の郡山や安堵町のボランティアガイドの「業平道」紹介としては、まあ異論のないところでしょう。

ところが、大阪の柏原市にも業平道があって、大和川沿いの竜田古道から柏原を経由して東高野街道を辿る道がそれで、柏原の大槻地区には斑鳩町と同じように立派な道しるべが建てられています。十三峠越えの道は、平群から河内の高安に越える道でももちろん柏原は通らない、業平道は斑鳩の竜田川の業平橋を渡ったところから、二つに分かれることになるのです。

以前、安堵町の西川さんが新聞に書かれた業平道の記事にも、この二つの道が紹介されて業平さんが本当はどちらを歩いたかまでは結論していない（結論する必要がない）というのだと思うのですが、これも新聞のコラムで紹介する文としては異論のない見解でしょう。

在原業平は平安初期の歌人で、平城天皇の孫という高貴な身分ですが、臣籍降下し在原氏を名乗ったと人物です。「伊勢物語」は全125段の、多くは在原業平の歌に短い話を付けた歌物語、業平を思わせる男が主人公の恋物語で、この中の第23段に、業平道伝承の元になった「筒井筒」の物語があります。

天理から高安まで十三峠越えなら21km、竜田道を通ると30km、時速5kmで歩いたとしても前者なら4時間、後者だと6時間、語られているようにこの道を業平が恋人に会いに通ったとすればかなりの距離に思えるのですが、王朝時代の恋人たちにはそれほど遠い道ではなかったのでしょうか。



.....昔、仲の良い幼馴染の男の子と女の子が居て、村の井戸のところでよく遊んだ。二人は大きくなって、男の背丈が村の井戸の縁より高くなり、女の子の髪が肩を過ぎた頃、幼いころの約束通り結婚した。

何年かして、男は河内の高安に新しい女が出来た。男が河内へ通うときは、女は笑顔で送り出した。男は女に別の男が居るのではないかと疑い、在る日河内へ行くふりをして家に帰り植え込みの陰で見ていると、女が綺麗に化粧をして現れ歌を詠んだ。

風吹けば 沖つ白波たつた山 夜半にゃ君が ひとりこゆらむ

男は自分を思ってくれる女のいじらしさに恥ずかしくなり、河内には行かなくなった。時たまに男が高安へ行ってみると、河内の女は始めの奥ゆかしさはどこへやら、今は気を許して自分で杓子をとって御飯を食器に盛るありさま、河内の女の下品さに嫌気がさし男はすっかり足が遠のいてしまった。河内の女は自分の思いを歌にして届けたが、一度冷えた男の気持ちは元に戻らず、二度と河内へ行くことはなかった.....。

これが伊勢物語の物語です。前段の幼馴染の二人が結婚する話、中段の業平が高安の女のもとに通う話、それと後段の高安の女の下品な様子を見て通わなくなる話はそれぞれ別の話のようで、おそらく三つの異なる話を一つにまとめたものでしょう。

「業平道」で問題になるのは中段の部分、確かに歌に「竜田」が出てくるし、女のいる河内の「高安」が出てくるが、肝心の男の済んでいた場所はどこにも書かれていない。ところが、伊勢物語より少し後に成立したといわれる「大和物語」にも同じ話と思われるものがあって、それには男と女は「葛城の郡」に住んでいたとある。この「伊勢物語」も「大和物語」も、多くの古い書物がそうであるように今日伝わっているのは原本ではなく写本だが、ここでは地名の出る「大和物語」が元の話伝えていていると考えていいでしょう。そうすると男は天理ではなく、葛城から竜田を越えて、河内の女のところに通ったことになるのです。

ちはやぶる 神代もきかず 立田川 から紅に 水くくるとは

これは、百人一首にある在原業平のあまりにも有名な歌だが、この歌のたいがいの解説記事には、「立田川」が斑鳩の紅葉の名所の龍田川であるとたいがい書いてあります。事実、龍田川公園の三室山にはこの歌の歌碑があり、業平の紹介もされています。

ところが、この歌の舞台は斑鳩の龍田川ではなく、大和川の河内と大和の境のあたり、亀の瀬溪谷のあたりです。古代にはこのあたりの大和川が「竜田川」と呼ばれ、溪谷の右岸の山が竜田山と呼ばれていました。業平以外にも竜田川を詠んだ古歌は数多く残されていますが、都の人々にとって奈良の紅葉の名所は、現代では電車が車で通り過ぎてしまうだけの大和川沿いの溪谷だったのです。

この大和川沿いに王寺のあたりから柏原へ抜ける古道が「竜田道」で、現在三郷にある「龍田大社」は、元は道沿いの山の上にありました。竜田道は西は柏原から渋川道を通して難波宮へ続き、東は法隆寺から下つ道を辿って平城宮に繋がっていた古代の幹線道路で、聖武天皇が難波へ行幸した道であり、称徳天皇が弓削の道鏡に会いに行った道なのです。平安時代にももちろんこの道はよく知られていて、都の貴族の歌の舞台になったのでしょうか。

とすれば、大和物語の男の住まいの「葛城」は、王寺のあたりのことと考えて、伊勢物語の業平さんは、王寺から竜田道沿いに竜田山を越えて柏原へ抜け、そこから河内の高安へ女に会うために通ったのでしょうか。伊勢物語の男が恋人のもとへ通った道は、聖武天皇や称徳天皇が通った古代の幹線道路の、竜田道だったのです。

業平が十三峠を越えて玉祖神社に参詣したおり、八尾の神立茶屋の辻にあった茶屋「福家」の梅野に恋をして八百夜も通いつめた。玉祖神社には業平が娘を呼び出すために吹いた笛が伝えられている

この話には十三峠が出てくるが、竜田の山は通らない。しかも河内の女は、福家の梅野さんという固有名詞で、どう考えてもこの梅野さん、業平さんの時代の人じゃないでしょう。この話の雰囲気ははっきり言って江戸時代、実は八尾の神立というところは、十三峠越えの道が東高野街道と交差するところで、江戸時代は大坂から奈良へ行く人や、高野山へ行く人で賑わったはず、そこに福家というお茶屋があって、梅野というかわいい看板娘が居て、この店の主人が宣伝のために作った話だとしたら……。

実はこの話には種本があります。江戸時代の元禄の頃に出版された「河内鑑名所記」がそれで、そこでは、業平は平岡の大明神の能見物のために高安の里を通った時、美しい娘をみそめて夜な夜々通ったという話で、娘を呼び出すための笛も出てきます。

もちろんこの娘は伊勢物語の河内の女、伊勢物語の業平のように、やがて業平は女に愛想を尽かして逃げ出してしまふ。すると女が追いかけてきて、業平が笛吹山というところまで逃げた時池があったので、そのはたの松の木に上って隠れていると、女は池に映った業平を見つけ、「業平様がここにおられる」と言って池に飛び込み、あわれにも死んでしまうという結末になっています。

この「河内鑑名所記」の平岡の大明神は玉祖神社のこと、2つの話に共通のキーワードは業平が玉祖神社に参詣して高安の女と出会うということ、当時玉祖神社は河内高安の名所で、沢山の人がお参りしたのでしょう。玉祖神社は十三峠越えの道沿いで、業平が玉祖神社に行くためには十三峠を越えなければならなかったのです。

江戸時代は出版文化の盛んな時代で、武士も町民もよく本を読んだのです。中世の仏教説話と違って、現代の小説に近い伊勢物語や源氏物語は、江戸時代の人々に人気があってこの業平の物語はよく知られていたのでしょうか。十三峠はこの時代の河内と大和を結ぶ主要な街道、街道沿いには業平が笛を吹いた笛吹き松や、業平が休んだ紅梅岩や衣掛岩があって名所として伝えられていたのです。

江戸時代はまた、西国参りや伊勢参りのように庶民が盛んに旅行をした時代、街道に残された王朝時代のプレイボーイの物語は、大阪や奈良の名所見物に訪れた人々のために、街道沿いの人々が作った風景だったのではないのでしょうか。例えば斑鳩の竜田の町に残された「よのみの木の業平伝説」のように……。



江戸時代に出版された伊勢物語の挿絵で業平の妻が歌を詠む所

或る時、櫛本（天理）の在原寺に立ち寄った旅の僧の前に、一人の女が現れた。女は伊勢物語の筒井筒の純愛物語を懐しむように語った後、井筒の女といわれる業平の妻は自分であると名乗り、寺に残された井筒の影に姿を消した。やがて眠った僧の夢に、業平の形見の冠と直衣（のうし）を身に付けた業平の妻が現れ、業平への思慕の情を述べて舞を舞う。舞い上げて井筒に姿を映せば、そこに見えたるは業平の面影。やがて夜が明け、女は消えて行き僧の夢は覚める

ここまでの話の業平道は、竜田越えの道にしろ十三峠の道にしろ、それは斑鳩から高安までの道で、肝心の天理から斑鳩までの道が出てこない。実は今までは古代と近世の物語ですが、もうひとつ日本史には中世があるのです。中世に作られた謡曲の物語の一つに、もっとも重要な「業平道」のカギがあるのです。

それが引用した世阿弥作の謡曲「井筒」の物語で、この幽遠な話は伊勢物語に基づいているが、ここには高安も河内の女も竜田山も十三峠も、世俗的な場所や話は一切登場しない。一貫して井筒の女の業平へのひたむきな愛情だけが描かれています。

ただここには業平道伝承の重要な鍵が示されています。櫛本の在原寺が登場するのです。この寺は在原業平の父親の阿保親王の建立とされ、業平がこの地で生誕したという伝承のあるところ、業平ゆかりの寺と伝えられるところです。

古代には奈良北部の東西の道は「北の横大路」と呼ばれ、それは斑鳩から竜田山を越える竜田道に繋がり、難波津からはるか海の彼方の国に繋がっていました。また東は東山中の都祁から伊賀を越えて東国に向かう重要な道でもありました。時代が変わってもこの道は奈良の東西を結ぶ最も重用な道で、その道の東と西の端には業平の伝承が残されていたのです。

在原寺と竜田山に残された業平伝承を繋いで「業平道」を作り上げたのは、この道を歩いた人々だったのでしょう。この道が古代から中世、近世の長い歴史時間を通して大和の国の幹線道路だったとすれば、長い時間をかけて「業平道」は作られていったのです。この道沿いの郡山や安堵町、斑鳩町に残されている素朴な伝承、例えば業平が河内へ通う途中に自分の姿を映したという井戸の伝承（郡山、安堵町）、業平に誘惑されないよう若い女達が鍋底の飯の焦げで顔を黒く染めたという話（斑鳩の高安村）などは、業平道を歩く人々が道端に落としていった伝承の欠片（かけら）なのではないでしょうか。

業平道が安堵町を通るところに広峰神社がありますが、広峰神社には陰陽師の伝承が残されています。神社の少し北にヤップ山と呼ばれるところがあって、そこは蘆屋堂満の邸跡と伝えられているのです。同時に広峰神社からは、磯城の川西から田原本を經由して檀原に延びる道があります。聖徳太子が斑鳩から飛鳥の御懸田宮に通ったといわれる古代の道で、中世には「大和猿楽」が伝わったと云われる道でもあります。

蘆屋堂満はもちろん架空の人物で平安時代の陰陽師、ここに蘆屋堂満の伝承を持ってきたのは、姫路にある広峰神社の御師や陰陽師たちでしょう。彼らは護符や豊作祈願のお札を売り歩いたり、占術、呪術などの陰陽術を広めていった人達です。二つの道が交わる広峰神社は大和の国の彼らの拠点だったのでしょうか。

中世には彼らは旅を生業とする人々、旅をしながら人寄せのために、町や村の辻々で即興の芸をし、面白い話を語り、そして業平道では、話の枕に遠い昔の業平さんの話をして、例えばどこの村にもある井戸の側なら、「ほらこれが業平さんが、河内の女に会いに行く時に自分の姿を映した鏡さ」と、そうです、古代に都の貴族が作り、江戸時代にお茶屋の主人が作った「業平道の風景」、中世では彼ら、旅をする人々が作ったのです。